

鉄砲洲神社 論語素読 解説

(平成21年9月11日)

為政第二

11 子曰く、故きを温めて新しきを知らば、以て師為るべし。

孔子が言うには、過去をよく何度も何度も考え直してゆくと、その中に、今に通ずる新しい意味がはっと閃いてくる。それでなければ、人さまの師とは言えない。

これは「温故知新」という言葉で世間に知られています。できれば「温故知新師」と、師をつけて戴くとよろしい。これはリーダーの条件です。今の政治家も、リーダーとしての条件は温故知新であると考えればよいでしょう。

福田首相が訪中の際に曲阜を訪れて、感想で「温故知新」と書かずに「温故創新」と書いた事があります。これはかなり響きをかっただけでも、ご本人はピンと来なかった。なぜなら、孔子は自分で何かを創り出すということはしないで、すべて過去に学んで、先人の紹介・解説のみに徹していました。自分が何か新たに主義主張を唱えることはしないで、必ず歴史の中から新しい意味を悟って、それを皆に伝えるということをしていました。ですから「温故創新」とは、日本の首相は何と申し上げたことをやるか・・・ということに響きをかっただけです。これはあまりマスコミでは流さなかったようです。

12 子曰く、君子は器ならず。

君子は立派な人と考えるとよろしい。

立派な人間は何にでも応じられるものである。沢山のお弟子さんを抱える、或いは沢山の部下を持つ人は、一つ事しか出来ない専門家というのはいけない。一つしかできない専門家が君子という位置に座ったなら、組織を分裂させてしまいます。したがって、トップリーダーなる者は、専門家ではなく、色々なことに通じていて何にでも応じられるようにならなければいけないとお考え下さい。

13 子貢 君子を問う。子曰く、先ず其の言を行ひ、而る後之に従うと。

子貢が孔子に「君子とは如何なるものか」と聞きました。子貢は能弁家で、私は大した者だと自分で思っている人間なので、先生もそれを認めてくれるでしょうという自負で、私

は君子として恥ずかしくはないだろう・・・という意味合いで聞いているわけです。

それに対して孔子が、「君子であれば、主張したいと思うことを先に喋らないで、まず実行しなさい。行動を起こした後で、自分の主張したいことを主張しなさい」と諭しています。

自民党と民主党のやり方を見ていると、言いたいことだけをボンボン喋るけれども、いっこうに実行しません。こういう現実と照らし合わせると、孔子が眺めれば、嘆き節になるのではないかと感じます。

14 しいわ子曰く、くんし君子はしゅう周してひ比せず。しょうじん小人はひ比してしゅう周せず。

孔子が言うには、立派な人間は沢山の人と仲良くはするけれども、馴れ合いにはならない。つまらぬ人間は、すぐに馴れ合うけれども、本当の意味での親しくは出来ない。

ここから「君子は義に喻り、小人は利に喻る」ということとして伝わっています。

渋沢栄一の解説を申します。

11の「温故知新」については、渋沢栄一が新旧を兼ね修めていくという温故知新の考え方をもち、明治政府の租税切り替えを断行したことが訳されています。

明治の初めは税金を米で納めていました。それをお金で納めてもらうように切り替えようと肚をくくったのが、明治2年です。実行できたのが、渋沢栄一はすでに退官していましたが、明治7年、陸奥宗光の手によって出来ました。

米で税金を納めるのをお金に変えるという事は、お米をお金に替えなければいけません。地方では、お米がだぶついたところで売りますから、べらぼうに安くなる。それで東京や大阪でお米が入ってくるのが遅くなり、お米が暴騰する。

国が米で税金をとっている時は、明治政府が自分たちでお米をお金に替える調整をしていました。それに約5年かかったのです。かなり大変な労力を要したわけですが、その際渋沢栄一は論語の中の「温故知新」で断行したのですが、「故例も打ち壊さずに新しきに進む」のは大変困難なことだとして、新しい租税制度の例を挙げています。

13の「先ず其の言を行い、而る後 之に従うと」について申します。

渋沢栄一の人物評価をお話します。木戸孝允と伊藤博文については、能弁家でよく主張をするだけでなく、よく実行したということで、木戸孝允と伊藤博文は非常に評価が高い。

山縣有朋に関しては、口に出して言わないけれども、腹の中で思った事は必ず実行する

人であると評価しています。

大隈重信は、子貢と似たようなもので、雄弁家であるけれども言ったことをすべては実行しない。大隈重信については、一歩下げた評価をしています。しかし、自分が官界に入る時には、大隈重信に「明治政府は色々な神様を日本国中から集めて、その知恵と力をもって明治政府を立ち上げるのだから、君も八百万の神の一柱になれ」と盛んに口説かれて、ついそれに騙されて明治政府に入ってしまったという内容を言っています。

他に、維新の三傑についても評価しています。

西郷隆盛については、外見からは偉いのか鈍いのかよく分からないような人であるけれども、何となく懐かしく感じると言っています。

大久保利通については、何を考えているか分からない、腹の底が見えない気味の悪い人間だという印象を強くもっていたので、嫌いな人間だと言っています。実際に渋沢栄一は、大久保利通と喧嘩をして官界を辞めていますから、その根っこには気味の悪いという感情があったのだと感じます。

木戸孝允については、自分自身が動かないで人を組織的に使う能力を持っている人だと評価しています。維新の三傑と言われた人は、大体が他の人間を動かす能力は豊富に持っていたと書いています。

14「君子は周して比せず。小人は比して周せず」を今の時代に当てはめてみれば、民主党が政権をとりましたので、民主党の中にいるリーダーの人達は、周して比せずなのか、比して周せずなのか、考えてみるとよいでしょう。民主党の当選議員たちは、今は非常に仲良くなってきているけれども、これは相手に対して迎合しているのではないだろうか。今、鳩山さんが組閣の最中ですから、非常に仲良くしたいという動きをしているけれども、本音は何なのだろうか、探してみる。つまらない人間は馴れ合ってグループを作り、派閥化して、自分を登用してもらおうと思って親しくなろうとする。そういう腹の底だけが透けて見えるような気がしております。

私も、一人一人の民主党議員を眺める時に、周して比せずの人なのか、比して周せずの人なのか気にして見ております。

本日は以上です。有難うございました。